

「地域学」構築のための地域資源インデックス

—地域資源再評価の手法と活用のために—

研究員：高橋一男（国際学部国際地域学科 教授）

はじめに

東洋大学地域活性化研究所の所報 No. 14（2017年）から No. 18（2021年）にかけて地域資源の再評価と地域づくりに関して論考を投稿してきた。その背景には少子高齢化、人口流出による過疎問題が深刻化している地域の活性化に一石を投じたいとの考えからである。2011年から石川県能登において地域づくりに関する調査研究や研修等を実施してきた経験から、人口減少を補う方法としてUターンによる関係人口の確保がカンフル剤としての役割を果たすことは明らかであるとの認識に至っている。しかしそれにも増して地域で生まれ育った人材がUターンで戻ってくる可能性を用意することが極めて重要であることを指摘したい。そこで本論考ではワークショップ形式のもとで地域住民が地域資源の再評価を行って地域資源インデックスを作成し、それをもとに「地域学」を構築する手法を提案する。

わが国の過疎問題

わが国の総人口は2008年をピークとして減少を続けているが、総人口が増加を続けていた半世紀以上前にすでに成長する都市へ人口が流出し農山漁村では人口減少地域が大幅に増えて、過疎地域と呼ばれるようになった。そのような地域は衰退地域と受けとめられて限界集落という用語も広がった。

国は人口減少が続く市町村を1970年に人口減少率と財政力指数を基準に過疎地域として指定し、特別措置法を制定した。その後、更新と延長を重ねて、2021年4月に「過疎地域の持続的発展の支援に関する特別措置法」が制定されている。過疎対策の目標として、本論稿の主たる目的である「人材の確保・育成」の他に、情報通信技術の活用、再生可能エネルギーの利用等がかかげられている。

総務省の過疎問題懇談会（宮口侗迪氏が座長）が、過疎地域の方向性として「先進的な少数社会（多自然型低密度居住地域）として国土の価値を発展させる」との提言をまとめたが、上記特別措置法に盛り込まれている。

本論考では、過疎が進む地域社会には評価に値する豊かな地域資源があり、そこでは人々の生活が営々と積み重ねられ、都市にはない価値があるとの考えに立脚し、過疎地域の将来において少数の人口であっても地域を支え発展させることができる人材の確保が重要であることを考察する。

地域資源の再評価

能登に限らず地方で地域調査を行うと必ずと言っていいほど「ここは田舎だから何もない」という言葉を聴くことが多い。また、仕事がないとの声も聴かれる。この仕事とは公務員、会社員など給与所得者を指しているようである。都市生活者からみれば豊かな自然環境やその自然からの恵みに溢れた地域が羨ましく思える。また都市には失われている共同体があり、人と人とのつながりを大切にする地域社会が残っている。

地方では価値ある地域資源があたりまえと受けとめられ評価されていない。人口流出が続く都市からのUターンが期待できない要因の一つになっていると思われる。そこで、あたりまえではない豊かな地域資源を再認識する地域づくり手法としてワークショップを通じて「地域学」を構築する手法をここで提案する。

「地域学」構築のための手法

地域住民の参加型ワークショップの課題として地域資源の再評価をすることで「地域学」の構築をめざすわけであるが、再評価をするプロセスで住民は地域資源の豊かさを知ることになる。そこに都市生活者が参加することであたりまえと思っていた資源があたりまえではなくなる。その気づきが過疎化した地域社会が再生、地域創成を促す原動力となると考えられる。

ワークショップでは地域資源を次の5つカテゴリーに分けてそれぞれの説明変数（地域資源を説明する内容）をあげていき、地域資源インデックス（索引）を完成させることを目的とする。当面は地域資源を次のように定義する。

- (1) ヒト（地域の担い手として長年従事、活躍している人材）
- (2) モノ（地域で生産されるもの）
- (3) コト（地域が培ってきた文化、習慣）
- (4) シゼン（地域を包括する自然環境、里山里海）
- (5) トキ（地域の歴史）

参加者は5つのカテゴリーにしたがって説明変数をあげていく。説明変数は複数のカテゴリーにまたがることもあり、それは認めることにする。この作業工程を繰り返して地域資源インデックスを作り上げていく。

インデックスの内容は何度か確認作業を通して吟味していく。ワークショップは室内だけではなく屋外へアウトリーチすることも求められる。資料の確認であったり対面でヒアリングを行うことも含まれる。

説明変数に関するヒアリングは重視したい。「ヒト」カテゴリーのみではなく、その他の変数についても関係者から直接話を聞くことで確認がとれ認識が深まることが重要である。

このような作業工程を経てインデックスを柱とする「地域学」の構築を行い報告書として執筆し、図書館等に保存し一般に公開、各方面で活用を図る。ワークショップの参加者は一連の作業に取り組むことによって地域資源の豊かさを再認識することになる。

地域資源インデックスの活用

2020年度は金沢市内の私立大学で地域資源インデックスづくりのためのワークショップを行い、その結果は『東洋大学地域活性化研究所報 No. 18』で報告した。2021年度は石川県立飯田高等学校生徒と東洋大学国際学部国際地域学科地域社会学ゼミの学生との協働学修として地域資源の再評価を目的とするワークショップを展開する予定であったが、コロナ禍のため実現しなかった。

そこで2022年度ワークショップ実施に備えて飯田高等学校所在地である珠洲市について、地産地消文化情報誌『能登』（2010年10月創刊、年4回発行季刊雑誌）をデータベースとして、同誌に取り上げられた記事情報を地域資源カテゴリーに分類してインデックスを作成した。その結果を次に示す。

珠洲石川県珠洲市の地域資源インデックス

地域資源のカテゴリー	地域資源の内容
ヒト（地域の担い手として長年従事、活躍している人材）	能登杜氏、浜士* ¹ 、農家、珠洲焼陶工、藻寄行蔵・橋元昂・忍久保善太郎* ² 、平時忠* ³ 、鈴木大拙* ⁴ 、大野長一郎
モノ（地域で生産されるもの）	日本酒、珈琲豆、ジビエ料理、揚げ浜塩* ⁵ 、珪藻土七輪、炭、ミョウガの葉、珠洲焼、大浜大豆（豆腐、味噌）、小麦、米、魚（イカ、フクラギ、シイラ、サバ、鯛、穴子、サザエなど）、能登栗、果物（いちじく、マスカット、メロン、ブドウ、スイカ）、百花蜜、山菜、無農薬野菜、ワカメ、蕎麦、梅、卵、きなこ、いも菓子* ⁶ 、いしり、岩ガキ、椿油、からし菜、お茶用の炭（大野製炭工場）
コト（地域が培ってきた文化、習慣）	酒作り、揚げ浜塩田法、珪藻土七輪、キリコ、民宿体験、飯田灯籠山祭り、珠洲デカ曳山祭り（ひらき山）、上戸の秋祭り、鶴島の秋祭り、正院川尻秋季大祭、堂事* ⁷ 、ワカメ干し、早船狂言、漂着物を敬う習慣、奴振り* ⁸ 、ヨバレ、二・七の市* ⁹ 、燈籠山祭り（おすずみ祭り）、鯨漁、引砂の秋祭り、伏見の秋祭り、きゃあらげ* ¹⁰ 、新嘗祭、いかなてて* ¹¹ 、片岩叩き堂祭り、あえのこと（あいのこと、タンカミ）、宝立七タキリコ祭り、寺家キリコ祭り、のっぺい汁、いも菓子、太鼓まんじゅう（梅鉢型）* ¹² 、かたくり玉、堅パン
シゼン（地域を包括する自然環境、里山里海）	季節風（→波の花* ¹³ 、マガキ景観* ¹⁴ ）、ジビエ、揚げ浜塩田、真浦海岸、野鳥が多い、森林、恋路海岸、見附島、大杉（新宮神社のスギ）、千手観音椿、鎮守の森、のとキリシマツツジ、タブノキ、さかさ杉（高照寺）、ゴジラ岩、環波神社* ¹⁵ 、山伏山、雲津海岸、平床貝層、宝立山、御

	穂スス美* ¹⁶ 、からす川
トキ（地域の歴史）	のと鉄道廃線（廃線利用としてのトロッコ* ¹⁷ 、隧道蔵* ¹⁸ ）、蛸島素麺* ¹⁹ 、美しい地名（恋路、珠洲など）、館家の五輪塔・板碑群* ²⁰ 、茅葺き屋根、上がり框、珠洲古陶（秋草文壺* ²¹ 、鳥樹文小壺）、黒丸家住宅* ²² 、須須神社（三崎権現）、雀踊り* ²³ 、花の寺（本龍寺など）、大野林火などの文学碑、能登瓦、正院焼* ²⁴ 、古麻志比古神社、加志波良比古神社、刀祢姓・岡田姓* ²⁵ 、馬縷・梨山大蛇伝説* ²⁶ 、砂取り節* ²⁷ 、大谷の十二名・馬縷の八名* ²⁸ 、琴江院、雲津白山神社、島崎三蔵家* ²⁹ 、翠雲寺、平床貝層、正院川尻城跡、須受八幡宮、木製笠塔婆・木製板碑* ³⁰ 、飯田城跡、春日神社、南黒丸八幡神社、西方寺古窯跡、曾我兄弟の墓* ³¹ 、空海ゆかりの地、御穂スス美、からす川、能登平家物語* ³²

（『地産地消文化情報誌 能登』vol.11～vol.43の記事情報から筆者が作成）

なお、上記インデックスの説明変数には地域独特の表現、意味等を含むので*を付しておいたので、以下の説明を参照されたい。

- *¹ 揚げ浜式製塩の責任者
- *² 明治時代に珠洲の塩業振興に尽力した3人
- *³ 珠洲に平時忠の墳墓がある。能登に配流となった文官
- *⁴ 金沢生まれの仏教学者。珠洲の飯田で初めて職に就く
- *⁵ 海水を塩田に撒く製塩方法、この製塩方法が残されているのは日本では珠洲だけ
- *⁶ ニッキの香りがするさつま芋の形に似せた菓子。さつま芋は一切使わないのが元祖
- *⁷ 当組によって営まれる古い形態の宮座を守る祭事
- *⁸ 秋祭りで行われるシャンガと呼ばれる毛槍を振りながら練り歩く祭事
- *⁹ 毎月2と7のつく日に定期市が行われる
- *¹⁰ 正院町、上戸町、宗玄町等でお祭りの曳山登場の際に唄う高砂節。祭りで歌う
- *¹¹ 珠洲の方言で「たいしたことない・どういたしまして」という意味
- *¹² 冠婚葬祭に使用されるもの。珠洲では梅鉢型をしているのが特徴
- *¹³ 季節風が強く吹くことで岩に打ち寄せた波が泡になり花のようにひろがること
- *¹⁴ 季節風と塩害から守るために家屋の周りを竹で囲うこと
- *¹⁵ 2017年に建立した海と漂着物を信仰する神社
- *¹⁶ 祭神ミホススミは御穂スス美からきていて、稲が素晴らしく実る所という意味である。実った穂が鈴のようなことと美しい海から珠洲と地名になった
- *¹⁷ 恋路駅旧駅舎からひいたトロッコ
- *¹⁸ 日本酒の貯蔵庫
- *¹⁹ 江戸時代に特産品とされ販売されていた。現在は作られていない
- *²⁰ 珠洲焼などが多く出土した遺跡。市指定文化財

- *^{2 1} 正院町で出土した焼き物。県指定文化財
- *^{2 2} 石川県の民家の中で最も古い様式がとられている家屋。重要文化財
- *^{2 3} 風流踊りの一種で現在はない。太田頼資が「能登名跡志」の中で記している
- *^{2 4} 正院村（現在の正院町）で生まれた焼き物
- *^{2 5} 刀祢職は中世の港湾取締役。里では同じ取締役は岡田と名乗った
- *^{2 6} 馬縹町の梨山の大きな池があり、そこに大蛇が住んでいるという伝説がある
- *^{2 7} 砂取り節は製塩作業歌で、江戸時代から歌われていた
- *^{2 8} 珠洲では通常姓名の名にあたるものを姓とする例が見られ、頼兼や頼光といった名前が家名として使われたという記述が残り、そこに大谷の十二名・馬縹の八名と記されていた
- *^{2 9} 幕末期に栄えた廻船業の家。島崎家は評判が良く、「松前行くなら三蔵の船で」とも言われていた
- *^{3 0} 全国最古の資料となる木製板碑と笠塔婆。造立したのは珠洲郡の領主と考えられている
- *^{3 1} 歌舞伎などの演目で有名な曾我十郎・五郎の墓が永禅寺境内にある
- *^{3 2} 義経が須須神社に蝉折の笛を寄進した。また須須神社の大鳥居近くには小説「源義経」の作者村上元三の句碑が建てられている

結びにかえて：高校生と地域資源インデックス

高大接続協働学習をここで紹介している意図は、進学や就職をひかえている高校生に自分が生まれ育った故郷についてポジティブな理解を促したいという考えからである。地域に縛り付ける意図はない。むしろ進学や就職で故郷を離れ、異文化を知ってほしいのである。異文化を知ることによって自文化を知って（再評価して）ほしいからである。故郷の良さ、豊かさを認識していずれはUターンする可能性を持ってほしいからである。彼らは先進的な少数社会の担い手になる可能性を持っているからである。

「地域学」の構築は故郷の優位性を知るプロセスであり、地域住民の「田舎だから何もない」意識を変える機会となる。今後は珠洲市における地域資源インデックスづくりの事例を積み重ねながら能登の他の地域に拡大、さらには石川県全域、そして国全体に及ぶ地域づくり手法の構築を試みたいと考えている。

参考文献

- 内山 節、『新しい共同体の思想とは』、農山漁村文化協会、2021年3月
- 高橋一男、「地域資源の再評価と地域学に関する研究-地域づくりのための「地域学」の構築-」、『東洋大学地域活性化研究所報 No. 18』、2021年3月
- 高橋一男、「地方へのUターン者確保に関する考察-東洋大生の能登ゼミ活動から見えてきたこと-」、『東洋大学地域活性化研究所報 No. 17』、2020年3月
- 高橋一男、「地域資源を活かした地域づくりに関する研究-コミュニティ組織と行政の関係性に着目して-」、『東洋大学地域活性化研究所報 No. 16』、2019年3月

高橋一男、「地域資源の再評価とネットワークによる地域活性化に関する考察」、『東洋大学地域活性化研究所報 No. 15』、2018年3月

高橋一男、「地域資源の再評価と地域の活性化」、『東洋大学地域活性化研究所報 No. 14』、2017年3月

経塚幸夫編、『地産地消文化情報誌 能登』、能登編集室、2010年10月から現在に至る
(vol. 1～vol. 46)

宮口侗迪、『過疎に打ち克つ-先進的な少数社会をめざして-』、原書房、2020年12月